

矢野遺跡発掘調査概要

—四国電力応神東線鉄塔建替工事に伴う発掘調査—

1991.3

徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

矢野遺跡発掘調査概要

—四国電力応神東線鉄塔建替工事に伴う発掘調査—

1991.3

徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

卷頭図版



調査地 No. 1 壁穴住居跡検出状況

序 文

徳島市国府町矢野の気延山東麓に、原始古代以来の人々の活動痕跡を今に残す「矢野遺跡」が位置します。国府町には「矢野遺跡」を中心に、西に気延山古墳群、源田銅鐸・銅剣出土地、中世城郭の矢野城跡、北に阿波国分尼寺跡、阿波国府推定城、南に阿波国分寺跡があり、阿波国有数の史跡・遺跡が密集し、歴史的環境に非常に恵まれた地とされます。

今回、「矢野遺跡」において、四国電力応神東線鉄塔建替工事に伴う発掘調査を実施する機会を得、さらに、発掘調査の成果を調査概要報告書として刊行する運びとなりました。

本書刊行におきましては、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくとともに、文化財の保護、保存、活用の一助となれば幸甚に存じます。

最後に、発掘調査の実施および概要報告書の刊行に対し、全面的な協力をいたしました四国電力株式会社徳島支店ならびに関係各位に対しまして、深く感謝を申し上げます。

1991年3月

徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

委員長 岩崎正夫

例　　言

- 1 本書は、昭和63年～平成2年に徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会・徳島市教育委員会が四国電力応神東線鉄塔建替工事に伴い国府町矢野・国府町早渕・国府町和田・国府町南岩延・不動町において実施した発掘調査および試掘調査の概要報告書である。
- 2 調査期間は、昭和63年5月24日～平成2年9月15日まで断続的に実施した。また、平成2年6月1日から整理作業に着手し、平成3年3月31日にすべての作業を終了した。
- 3 鉄塔建替工事箇所（鉄塔No.1～No.9・11～22）21地区の内、徳島市国府町矢野字城山479-1（鉄塔No.1）、国府町矢野字せんだんの木450-1（鉄塔No.2）において発掘調査を実施し、鉄塔No.3～9、10～22については試掘調査を実施した。所在地は次のとおりである。国府町矢野字松木342-1、346-1（鉄塔No.3）、中字原渕493、494-1（鉄塔No.4）、中字道免598-1（鉄塔No.5）、早渕字荒井617-1、618-1（鉄塔No.6）、早渕字講ブチ597-1（鉄塔No.7）、中字松ノ木54-1（鉄塔No.8）、早渕字角ノ本98（鉄塔No.9）、和田字表5-2（鉄塔No.11）、和田字西ノ宮26-1（鉄塔No.12）、南岩延字八反田26-1,27-1（鉄塔No.13）、岩延字萬代303,329（鉄塔No.14）、南岩延字三反地55-1（鉄塔No.15）、不動西町1丁目361-1,5（鉄塔No.16）、不動西町2丁目1397-2,1398-2（鉄塔No.17）、不動西町2丁目1451-1,2,3,4（鉄塔No.18）、不動西町1丁目512-1,3（鉄塔No.19）、不動西町1丁目395-3（鉄塔No.20）、不動西町1丁目361-3,4,5,6（鉄塔No.21）、不動本町3丁目1747-6（鉄塔No.22）である。発掘調査面積は合計約600m²、試掘調査面積は合計約200m²である。
- 4 発掘調査に伴う日誌、図面、写真、台帳、出土遺物は徳島市教育委員会が保管する。
- 5 発掘調査を実施するにあたり、四国電力株式会社徳島支店には全面的な協力と援助を得た。また、発掘調査から遺物整理を経て本書の刊行に至るまでの間、下記の方々の参加・協力を受けた。御芳名を記すとともに、感謝の意を表したい（順不同・敬称略）。黒田卓、地上仁、樋福博、倉佐見次、佐々木望、椎野洋一、岩本芳和、松野多恵子、正木マサエ、山口良一、清重隆弘、早渕定次、大田アサエ、宮本美子、庄野ヨシ子、藤本カズエ、露口啓子、山口文子、折野絵美、佐藤智恵、浜直樹、中西和寿、須原義仁、林利行、青木健司。
- 6 本書作成に関して、（財）徳島県埋蔵文化財センター・菅原康夫氏には、出土遺物について、貴重なご意見をいただいた。記して感謝の意を表する。
- 7 発掘調査および本書の執筆・編集は、徳島市教育委員会社会教育課主事勝浦康守が担当した。

目 次

序 文

例 言

本 文 目 次

I 遺跡の立地と歴史的環境	1
II 調査に至る経緯と経過	3
III 調査地No.1の調査概要	5
(1) 竪穴住居跡	5
(2) 土 壤	11
(3) 自然落ち込み遺構	11
IV 調査地No.2の調査概要	15
(1) 土 壤	15
(2) 溝	19
V 小 結	19

挿 図 図 版

写 真 図 版

挿 図 版

- 図1 遺跡位置図
図2 調査位置図
図3 調査地No.1, 調査地No.2概略図
図4 調査地No.1検出遺構図
図5 竪穴住居跡SH01出土遺物
図6 竪穴住居跡SH01遺物出土位置図
図7 竪穴住居跡SH02出土遺物
図8 竪穴住居跡SH02(30~51), 土壌SK01
(52), 自然落ち込み遺構SX01(53・54)
出土遺物
- 図9 竪穴住居跡SH02遺物出土位置図
図10 調査地No.2検出遺構図
図11 土壌SK01(55~57), SK02(58), SK
03(59・60), SK04(61)出土遺物
図12 溝SD01(62~65), SD03(66~70)出土
遺物

写 真 版

- 卷頭図版 調査地No.1 竪穴住居跡検出状況
P L - 1 上: 調査地風景
下: 調査地No.1 全景
P L - 2 上: 竪穴住居跡SH01, SH02検出
状況
下: 竪穴住居跡SH01検出状況
P L - 3 上: 竪穴住居跡SH02検出状況
下: 竪穴住居跡SH02遺物検出状
況
P L - 4 上: 調査地No.2 全景
下: 土壌SK01遺物検出状況
- P L - 5 竪穴住居跡SH01出土遺物
P L - 6 竪穴住居跡SH02出土遺物
P L - 7 竪穴住居跡SH02出土遺物
P L - 8 竪穴住居跡SH02出土遺物
P L - 9 調査地No.1 土壌SK01(52), 自然
落ち込み遺構SX01(53・54), 調査
地No.2 土壌SK01(56・57), SK03
(59・60), SK04(61) 出土遺物
P L - 10 調査地No.2 溝SD01(62~64), SD
03(66~70), 土壌SK03(71)出土
遺物

I. 遺跡の立地と歴史的環境（図1）

矢野遺跡は、徳島市に西接する石井町とを南北に分断する気延山の東麓、徳島市国府町矢野に所在する。矢野遺跡の東方には、天正年間の付替工事以降、その川筋を今にとどめる鮎喰川が、吉野川に合流するべく北東方向に流れを保っている。矢野遺跡はこの鮎喰川水系の旧河川が形成した標高約T.P.+7m前後の沖積微高地上に位置し、鮎喰川左岸の弥生時代の集落遺跡として周知されている。

矢野遺跡における発掘調査は、1976年、徳島県教育委員会が四国電力国府変電所構内において発掘調査を実施して以来、徳島市教育委員会による発掘調査を含めて、数次にわたる発掘調査が実施されている。しかしながら、現在までの発掘調査が変電所構内を中心にして実施されてきたものであり、集落の拡がりや集落経営の時間幅など遺跡の様相に関する研究は、資料不足からの制限を受けざるを得ないものであった。

近年、矢野遺跡における発掘調査として、1988年、市道改修工事に伴う徳島市教育委員会の発掘調査がある。変電所構内に近接する地点での発掘調査であり、古墳時代初頭の住居跡を確認し、集落の平面的・時間的拡がりに対し貴重な情報を得ている。⁽¹⁾

このような経過において、1980年代、畿内からの矢野遺跡に対する積極的な研究アプローチとして、岩崎直也氏の論考がある。⁽²⁾ 岩崎氏は、瀬戸内海沿岸播磨における庄内式併行期の撒入土器の問題に関して、従来、讃岐系と呼ばれていた一群の中に、阿波産の可能性を示唆する土器群を抽出し、それらの土器群と矢野遺跡出土の土器群との間に類似性を認め、これら撒入土器群に対し「矢野式(阿波型)」の名称を提唱している。しかしながら、矢野遺跡出土土器に対する詳細な検討までには及んでいない。

このような矢野遺跡の様相に反して、それを取り巻く周辺地域においては、阿波国を代表すべき歴史が展開されている。

古墳時代には、矢野遺跡に西接する気延山に、古墳の造営が精力的に行われる。代表的な古墳としては、奥谷1・2号墳、宮谷古墳、矢野古墳などが確認されているが、気延山における実態に、現在、明確な評価はない。ただし、存在なき不明確さであるとは決して言い難い。⁽³⁾

奈良時代以降、矢野遺跡の周辺域では、北に、阿波國府跡推定城、阿波國分尼寺跡、南に、阿波國分寺跡が存在し、一地方の一地域において国家的規模の地域開発が行われたことを示している。しかしながら、それらの中心に位置する矢野遺跡においては、この時代以降の人的活動痕跡は全く不明瞭であり、考古学における歴史の空白地帯へ突入する。

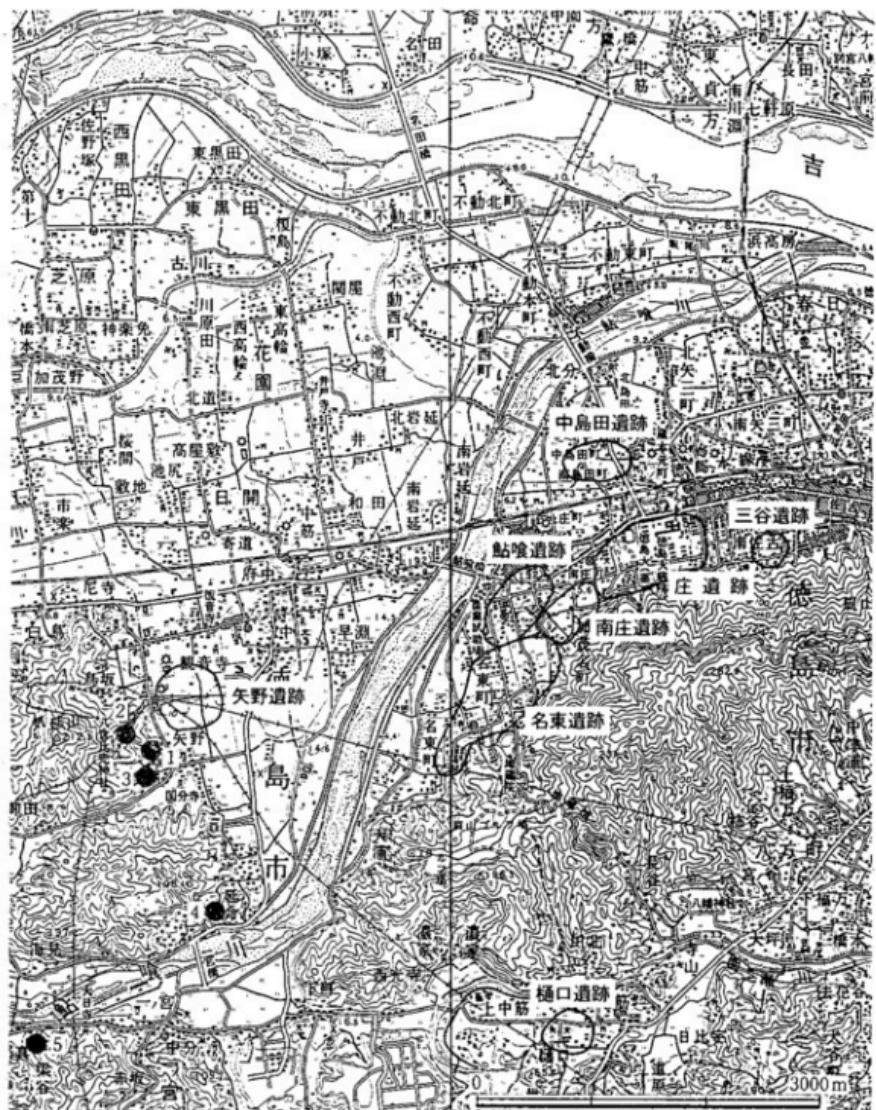


図1 遺跡位置図（国土地理院発行5万分の1図幅「徳島」「川島」使用）

1. 奥谷1号古墳
2. 奥谷2号墳
3. 宮谷古墳
4. 斎田銅鐸・銅剣出土地
5. 安都真銅鐸出土地

II. 調査に至る経緯と経過（図2、3）

徳島市国府町～不動町に所在する四国電力株式会社の高圧線鉄塔（通称応神東線）の建替工事に伴い、四国電力株式会社徳島支店と徳島市教育委員会との間で工事時の埋蔵文化財の取り扱いについて事前の協議が行われた。建替工事地区の一部が周知の埋蔵文化財包



図2 調査地位置図

藏地である「矢野遺跡」の一角に位置することから、徳島市教育委員会は文化財保護法第57条2第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘届出書の提出指導を行うとともに、周知の埋蔵文化財包蔵地内における工事箇所（鉄塔No.1、鉄塔No.2）に関して、発掘調査の必要性について同意を得た。さらに、従来、埋蔵文化財包蔵地として認識されていなかった地域での工事に対しては試掘調査の実施後、明確な遺跡の存在を確認し得た場合に本格調査を実施することで両者の合意に達した。徳島市教育委員会は徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（委員長：岩崎正夫）を組織するとともに、四国電力株式会社徳島支店との間において、埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結し、文化財保護法第57条1第1項の規定に基づき発掘調査を実施した。



図3 調査地No.1 調査地No.2 概略図

発掘調査および試掘調査は、四国電力株式会社徳島支店の鉄塔建替工事計画に従い、昭和63年5月24日～昭和63年10月5日にかけて鉄塔No.9,11～16,20～22の試掘調査を実施、平成元年5月1日～5月31日にかけて鉄塔No.17～19の試掘調査を実施した。従来、埋蔵文化財包蔵地として認識されていなかったこれらの地域での試掘調査の結果、明確な遺跡の存在が確認されず本格調査の実施には至らなかった。これに対し、周知の埋蔵文化財包蔵

地「矢野遺跡」における発掘調査は、平成2年3月6日～平成2年5月31日まで鉄塔No.1, 2地区において実施し、鉄塔No.1(調査地No.1)では弥生時代終末期から庄内式併行期にかけて使用・廃絶された住居跡の検出、また、鉄塔No.2(調査地No.2)では弥生時代および中世の遺構、遺物を確認し、当該周辺地域が弥生時代および中世における集落の一角に位置することが明確化した。また、平成2年9月1日～9月15日まで鉄塔No.3～8の試掘調査を実施したが、この地域においても明確な遺跡の存在が確認されず、これにより現地での発掘調査および試掘調査のすべての作業を終了した。

今回、本書において主に取り扱う報告事項は、平成2年3月6日～平成2年5月31日まで鉄塔No.1, 2(調査地No.1, 2)において実施した「矢野遺跡」の発掘調査についてである。

なお、調査成果の一部は、第11回埋蔵文化財資料展「阿波を掘る」(平成2年10月31日～11月5日)において出土遺物の展示を行い、第6回文化財講演会・文化財調査報告会(平成2年11月3日)において発掘調査の概要報告を行っている。

III. 調査地No. 1 の調査概要

調査地周辺の標高は、T.P.+6.5mを測る。現代水田耕土層下に層厚15cmの床土および層厚15cmを測る褐灰色砂質シルト層が堆積し、その下位に遺構検出のベースとなる黄色シルト層が堆積する。褐色砂質シルト層には、弥生時代から中世に至る遺物の混在が認められ、周辺地域は後世の削平を受けているものと考えられる。今回の調査では、現代水田耕土層下30cmの黄色シルト層上面にて、竪穴住居跡、土壙、ピット、自然落込み遺構を検出している。以下、主な遺構・遺物について概略する。

(1) 竪穴住居跡(図4～6, PL-1, 2, 5)

(i) 竪穴住居跡SH01

平面形が不整円形を呈し、径7m、深さ0.3mを測る。北西部にテラス状の張り出し部を持つ。また、壁面に沿って、削り出しによって作出された幅1mの高床部が巡り、中央部の床面との比高差は約10cmある。壁溝は存在しない。住居内にピットを4個確認している。埋土は、にぶい黄橙色～浅黄色砂礫混じりシルトであり、住居内的一部分には、焼土、炭化物が残存する。出土遺物には、壺(1・6), 壺(2～5), 鉢(7～12・15・16), 底部片(13・14)がある。

壺(1)は、頸部から大きく外反する口縁部を持ち、端部をわずかにつまみ上げ、横方向のナデが施されることにより口縁部端面には擬凹線が生じる。頸部外面は縦方向の刷

毛調整後、ナデが施される。二重口縁壺(6)は、直立する頸部から大きく外反する広口壺の口縁部にゆるやかに外反気味に立ち上がる口縁部を貼り付けた形態を呈する。口縁端部への粘土紐の貼り付け位置が、端部よりわずかに内側に位置するため、口縁屈曲部が外側に突出する。また、頸部から胴部への屈曲部に断面形が三角形を呈する貼り付け突帯が付される。口縁端部および口縁屈曲部さらに頸部突帯に刻み目、口縁部および頸部外面に2対1組の円形竹音文が施される。頸部外面に縦方向の刷毛調整、頸部内面に横方向の刷毛調整が施される。

甕(2)は、「く」の字状に屈曲する口縁部を持ち、端部を上下にわずかに拡張させ、端面には、横方向のナデにより擬凹線が生ずる。甕(3・4)は、「く」の字状に屈曲する口縁部の端部を斜め上方につまみ上げる。甕(4)の体部外面には、叩き後、縦方向の刷毛調整が施されるが、叩き目を完全に消えない。

鉢は、体部が直線的に立ち上がるもの(8)、内弯気味に立ち上がり半球状を呈し、平底の形態をとどめるもの(10・11)、内弯気味に立ち上がるが、底部が完全な丸底を呈するもの(12)がある。鉢(9)は、浅い皿状の形態を呈し、口縁端部を面取る。鉢(15)は平底の名残をとどめ、体部は内弯気味に立ち上がるが、口縁部がわずかに外反する。内外面とも刷毛調整が施され、口縁部は、横方向のナデで仕上げる。小型丸底鉢(16)は、内弯気味に立ち上がる口頸部を持ち、胴部の屈曲は明瞭であり、底部は小さな平底の形態を呈する。口頸部に縦方向の刷毛調整が施され、口縁部は横方向のナデで仕上げる。

(ii) 窪穴住居跡SH02 (図4, 7~9, PL-1~3, 6~8)

平面形が不整円形を呈し、径5m、深さ0.5mを測る。南東部にテラス状の張り出し部を持つ。また、壁面に沿って、削り出しによって作出された幅1~1.5mの高床部が巡り、中央部の床面との比高差は約10cmある。壁溝は存在せず、柱穴も確認されない。住居内無柱穴の窓穴住居跡であろうか。埋土は、にぶい黄橙色砂疊混じりシルトである。また、住居中央部に不整形形を呈する土壤が検出される。土壤内には、焼土、炭化物の痕跡は認められない。出土遺物には、壺(17~19・23~25)、甕(20~22・26~29)、鉢(30~33)、底部片(34~50)、土製筋錘車(51)がある。

壺(17・19)は、頸部から大きく外反する口縁部を持つが、(17)の口縁部の屈曲は水平に近い。(17)は、口縁端部を上方につまみ上げ、(19)は、上下にわずかに拡張させる。ともに、口縁部端面には横方向のナデにより擬凹線が生ずる。(25)は直立する頸部から短く外反する口縁部を持ち、端部は面取り気味である。頸部から体部外面にかけて、縦

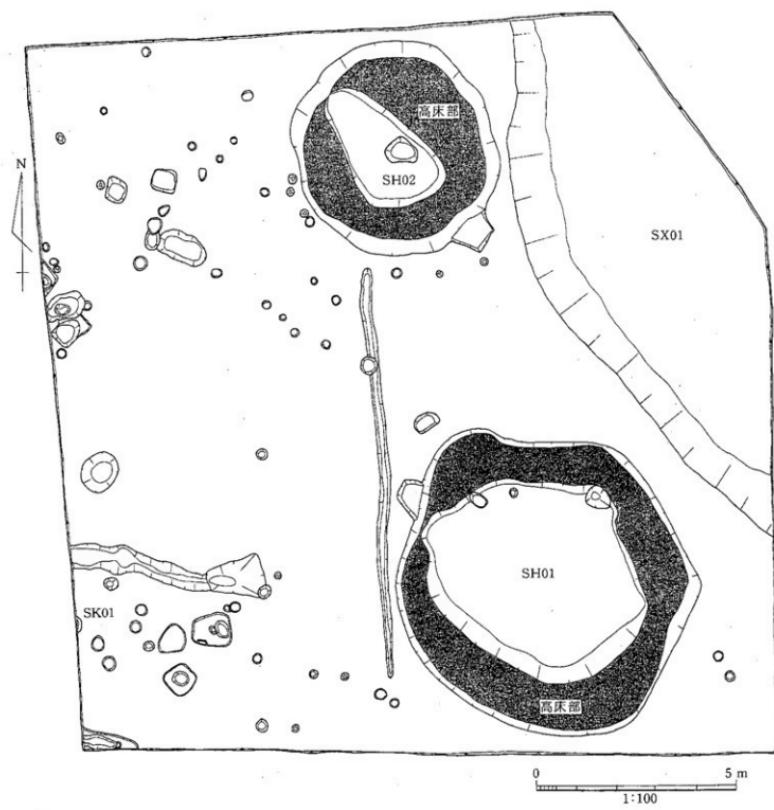


図4 調査地No.1検出造構図

方向のヘラミガキ、頸部内面は縦方向のヘラミガキ、体部内面は、ヘラケズリが施される。(19・25)は、粘土紐の接合痕跡が非常に明瞭に残る。二重口縁壺(23)は、頸部から水平方向に外反する口縁部に直立気味の口縁を貼り付ける。口縁部外面には、多条の凹線文が施される。(24)は、「く」の字状に屈曲する口縁部の端部を上下に拡張し、拡張部の外面を凹面に仕上げ、複線锯歯文が施される。頸部外面に縦方向のヘラミガキが施される。

甕(20~22・26~29)は、いずれも「く」の字状に屈曲する口縁部を持ち、口縁端部を上方につまみ上げるもの(26・28)、下方にわずかに拡張するもの(20)、丸く仕上げるもの(21・22・27・29)がある。(20・26~28)は、体部外面には、縦方向の刷毛調整が施される。(22)は、平底の形態を呈し、「く」の字状に屈曲する口縁部を持ち、端部を丸く仕上げる。体部外面には主軸方向が変化する水平ないし右上がりの叩きが施される。体部内面は、頸部屈曲部までケズリ上げる。(27)の頸部外面には、刷毛調整以前の叩き目の痕跡が認められる。(21・22・27)は、「口縁叩き出し手法⁽⁴⁾」が用いられる。(29)は、やや、胴長の体部を呈し、体部外面には、水平ないし右上がりの叩きが施された後、体

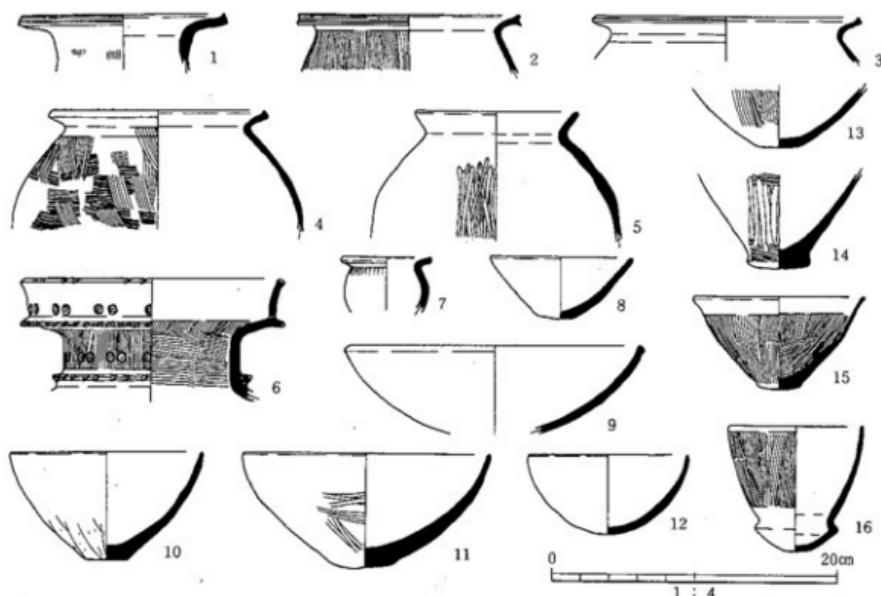


図5 積穴住居跡SH01出土遺物

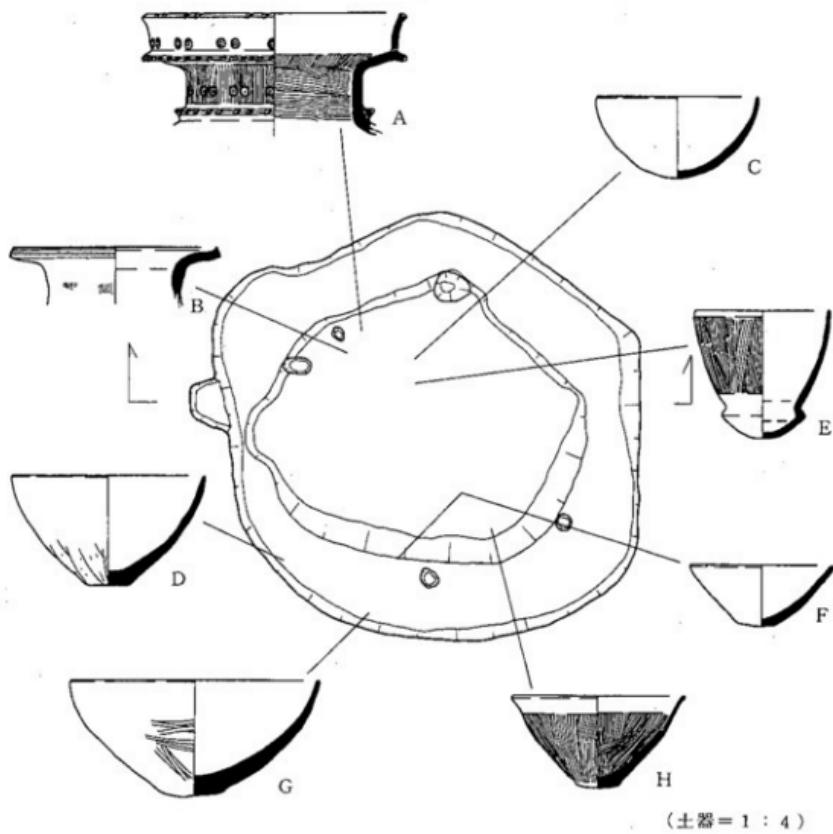


圖 6 壓穴住居跡SH01遺物出土位置図

部下半には、縦方向のヘラミガキが施される。体部内面下半は、ケズリ上げるが、上半には、粘土紐の接合痕跡が明瞭に残る。

鉢(30)は、直線的に斜め上方に立ち上がる体部から、わずかに外反する口縁部を持ち底部は平底をとどめる。鉢(31~33)は、いずれも「く」の字状に短く外反する口縁部を持つ。(31)は、肩部に明瞭な屈曲を示し、シャープな稜線が生ずる。体部外面下位に縦方向のヘラミガキが施される。(32)は体部最大径が口径を凌ぐ。体部外面に刷毛調整、体部内面にヘラケズリが施される。底部は平底を呈する。(33)は、体部が内湾気味に立ち上がり、体部内外面ともに刷毛調整が施される。底部は平底を呈し穿孔を受ける。

底部片は、丸底のもの(43・48)、平底のもの(36~42・49)、尖底のもの(46)、小さな平底のもの(45・47)がある。(46・47・49)は穿孔を受け、(49)は、3個以上の穿孔が施される。使用目的、機能差として捉えられようか。

(2) 土 壤

(i) 土壌SK01 (図4, 8, PL-9)

調査地内において、全体の1/2を検出しており、平面形が不整方形を呈し、径0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は、暗灰黄色シルトである。出土遺物には、高坏(52)がある。

高坏(52)は、杯底部に粘土紐を接合し、外上方に大きく聞く口縁部を持ち、粘土紐接合部には、鈍い稜線が生ずる。脚柱部は短く、脚裾部が大きく広がる低脚高坏である。脚部に円形の9個の孔を穿ける。

(3) 自然落ち込み遺構

(i) 自然落ち込み遺構SX01 (図4, 8, PL-1, 9)

調査地の北東部には、遺構検出ベースとなる黄色シルト層の堆積が非常に薄く、その下位には、礫(河原礫)層が堆積する。この礫(河原礫)層の検出レベルは北東から南西方向へ低下しており、黄色シルト層の堆積以前に周辺部での旧河道の存在が考えられる。おそらく、旧河道部における黄色シルト層の堆積過程において、河原部に浅い落ち込み状の窪地が形成されたものであろう。埋土は、にぶい黄色砂礫混じりシルトである。出土遺物には、壺(54)、鉢(53)がある。

壺(54)は、頸部がゆるやかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は面取る。頸部から体部外面には、縦方向の刷毛調整、体部外面下半には、縦方向のヘラミガキが施される。

鉢(53)は、内湾気味に立ち上がる体部に丸底を持つ。体部内外面には、板状の調整工具の圧痕が残る。

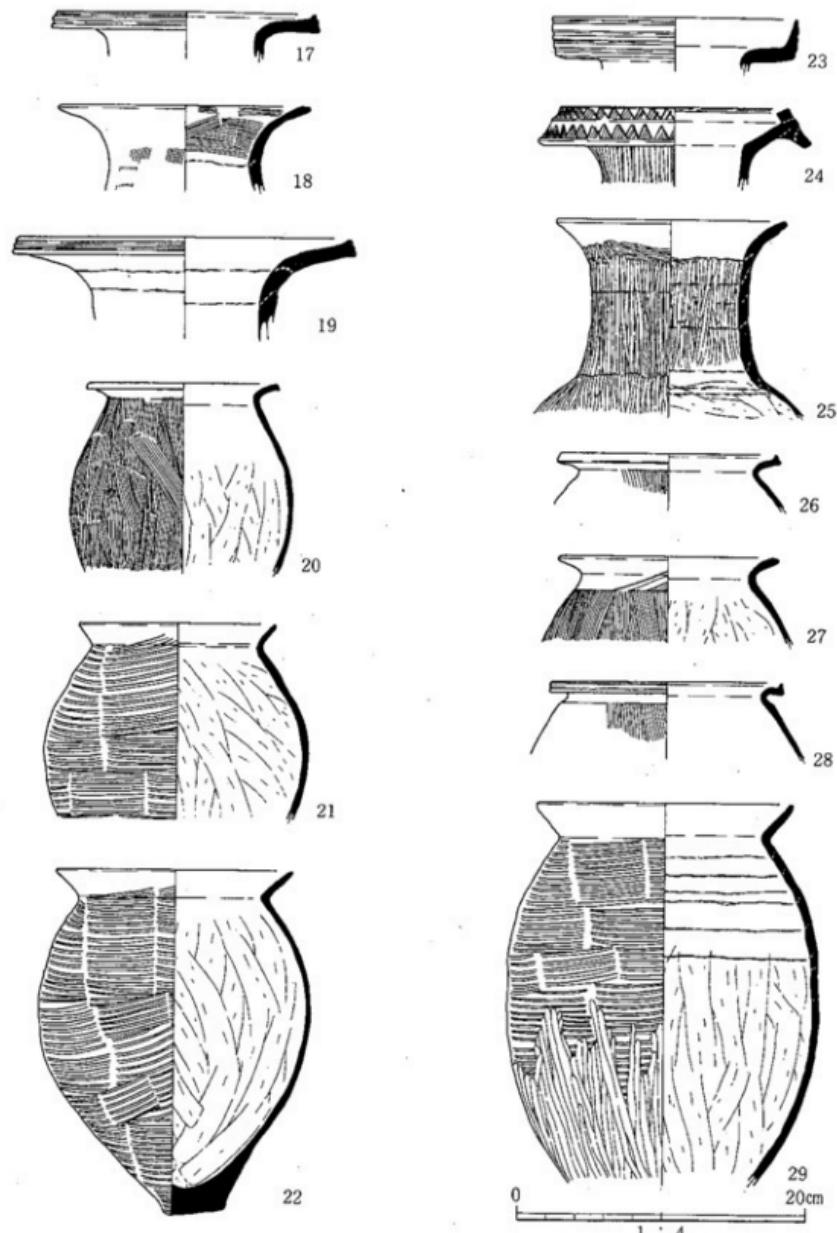


圖 7 壓穴住居跡SH02出土遺物

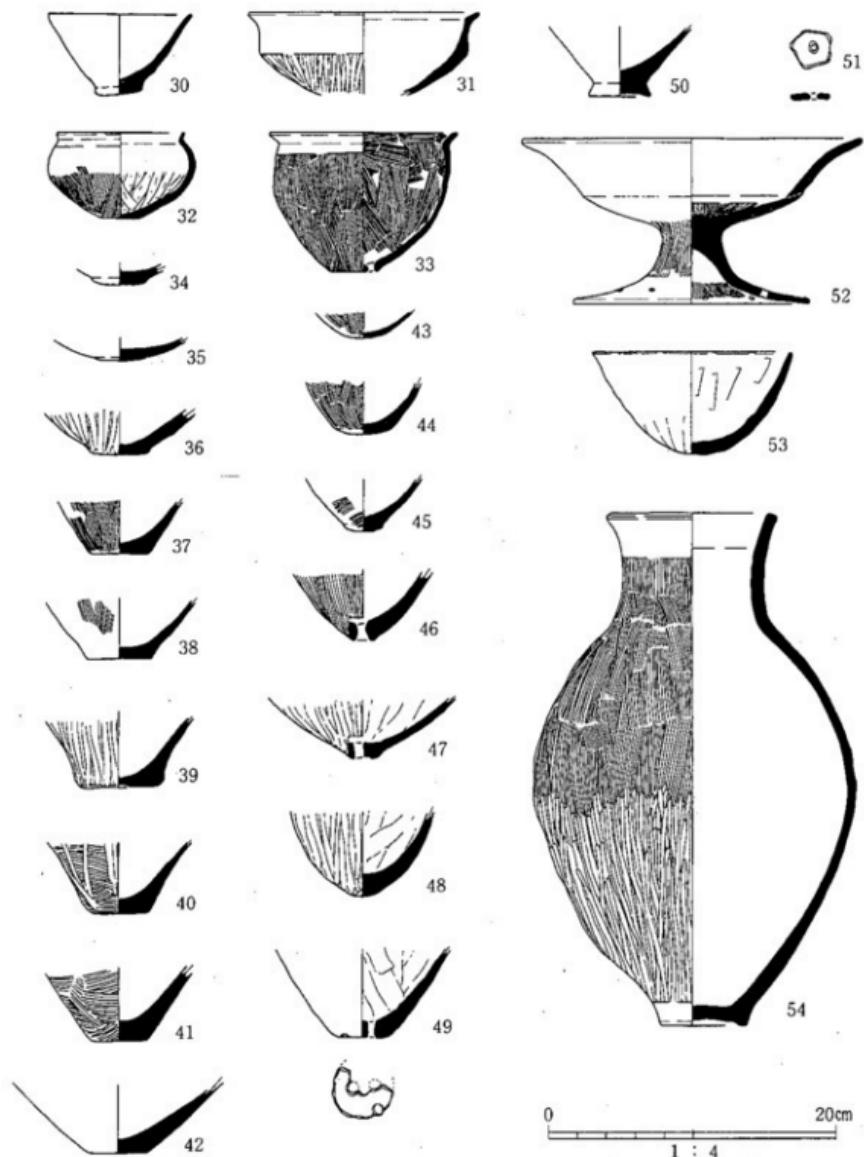
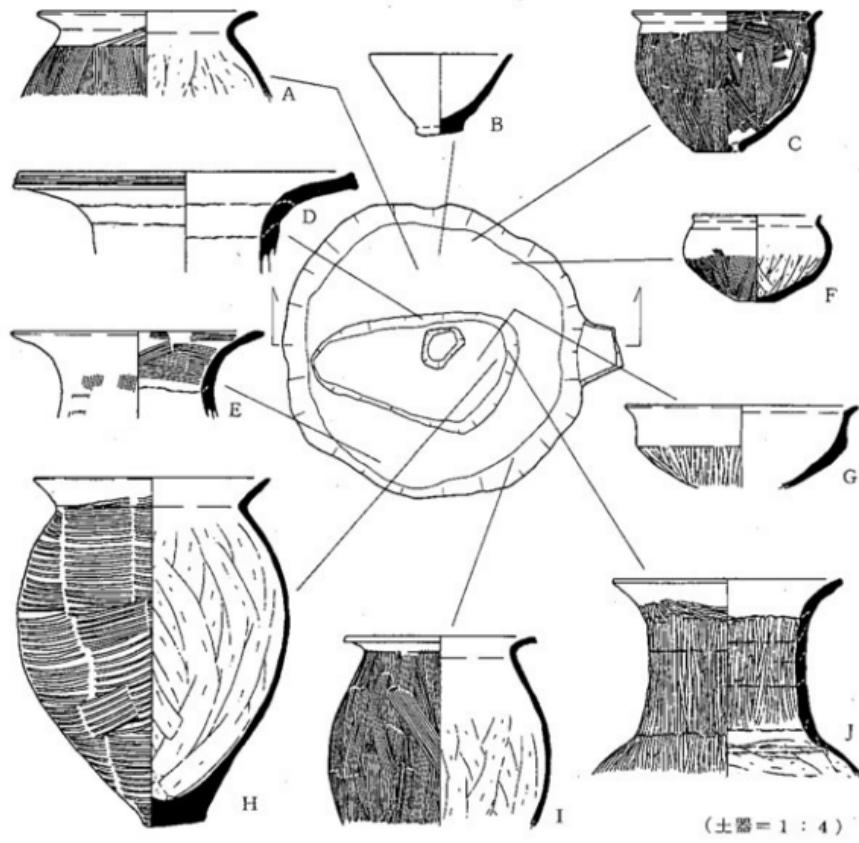


図8 積穴住居跡SH02(30~51), 土壌SK01(52), 自然落ち込み遺構SX01(53・54)出土遺物



(土器 = 1 : 4)

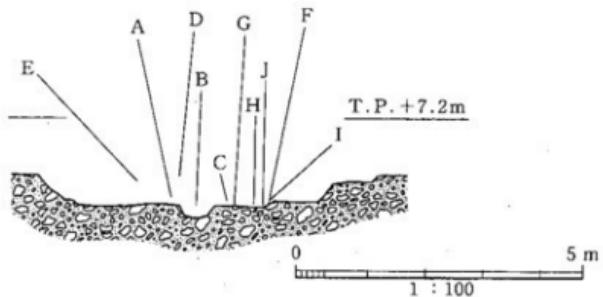


図9 整穴住居跡SH02遺物出土位置図

IV. 調査地No. 2 の調査概要

調査地周辺の標高は、T.P.+7.2mを測る。現代水田耕土層下に、層厚10cmの床土および層厚30cmを測るにぶい黄橙色砂質シルトが堆積し、この層は調査地No.1において、確認された褐灰色砂質シルトに対応するものと考えられる。調査地No.1同様に、にぶい黄橙色砂質シルト層は、弥生時代から中世にいたる遺物を包含し、後世の削平が考えられる。この層の下位に遺構検出のベースとなる黄色シルト層が堆積する。黄色シルト層は下位に行くにつれて、砂質化し検出上面より-50cmではすでに細砂層へ変化する。調査地No.2より東方約150mの調査地No.3では、遺構検出ベースの黄色シルト層の堆積層厚が非常に薄く砂礫層が堆積することから、当調査地は、旧鮎喰川水系の氾濫原に西接する地域であると考えられる。今回の調査では、現代水田耕土層下40cmの黄色シルト層上面にて、溝、土壙、ピットを検出している。以下、主な遺構、遺物について概略する。

(1) 土 壙

(i) 土壙SK01 (図10, 12, PL-4, 9)

平面形が橢円形を呈し、長径0.9m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は、暗灰黃色シルトに黄色シルトが混在する。出土遺物には、壺(56・57)、甕(55)がある。

壺(56)は、直立する頸部から「く」の字状に屈曲する口縁部を持つ。頸部外面には、縦方向の刷毛調整が施される。口縁部にはナデが施され、端面は凹面を呈する。(57)は、外反しながら立ち上がる口頸部を持つ。頸部外面には、縦方向の刷毛調整が施され、体部との屈曲部にヘラ状圧痕が施される。頸部内面には、横方向の刷毛調整が施され、口縁部はナデにより仕上げられる。口縁端面は凹面を呈する。甕(55)は、頸部から直曲する受口状の口縁部を持つ。口縁部はナデにより仕上げられる。

(ii) 土壙SK02 (図10, 12, PL-4, 9)

平面形が不整長円形を呈し、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は、暗灰黃色シルトである。出土遺物には、高杯(58)がある。

高杯(58)は、杯部は皿形を呈する。杯部はゆるやかに立ち上がり、口縁部は垂直に立ち上がり、口縁端部をほんのわずか左右に肥厚させる。口縁端面は平坦である。

(iii) 土壙SK03 (図10, 12, PL-4, 9, 10)

平面形が不整長円形を呈し、長径1.6m、短径0.9m、深さ0.5mを測る。埋土は、暗灰黃色シルトである。底部が平坦で、壁面が垂直を呈することから土壙墓と考えられる。出土遺物には、壺(60)、鉢(59)、柱状片刃石斧(71:PL-10)がある。

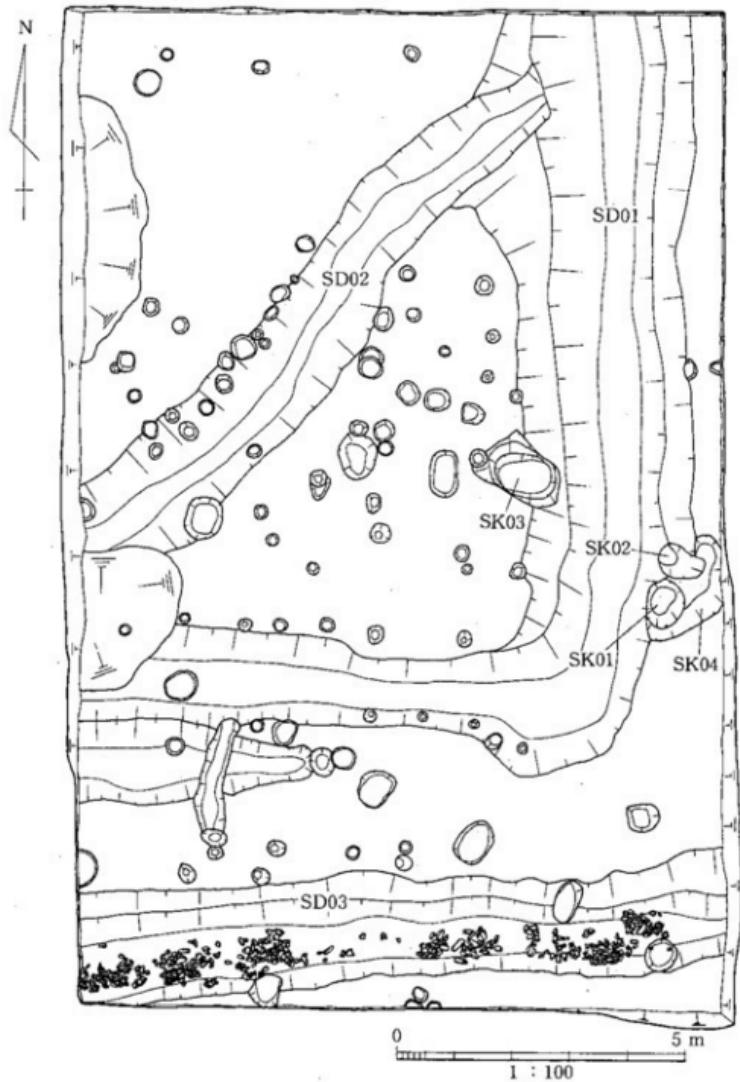


図10 調査地No. 2 検出遺構図

壺(60)は、頸部はゆるやかに外反し、口縁端部は面取る。口頭部外面には、縦方向の刷毛調整、体部外面下位には、縦方向のヘラミガキが施される。鉢(59)は、「く」の字状に屈曲する口縁部を持ち、体部外面には、叩きが施される。口縁部の形成には、「口縁叩き出し手法」が用いられる。

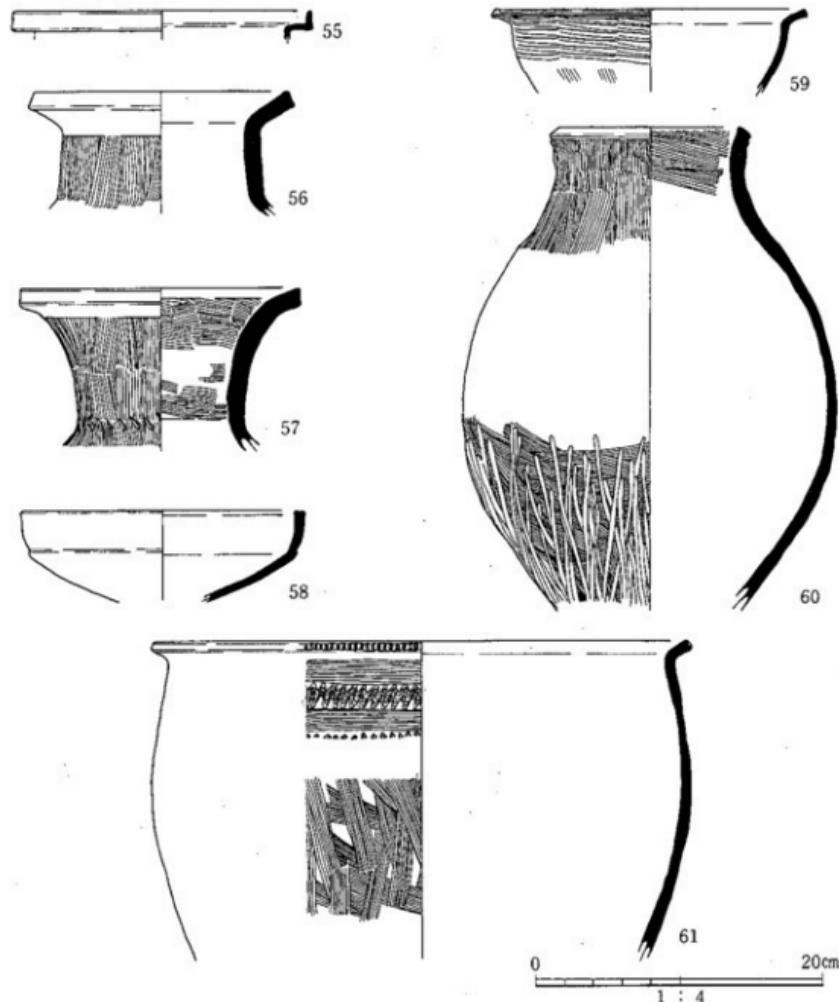


図11 土壙SK01(55~57), SK02(58), SK03(59・60), SK04(61)出土遺物

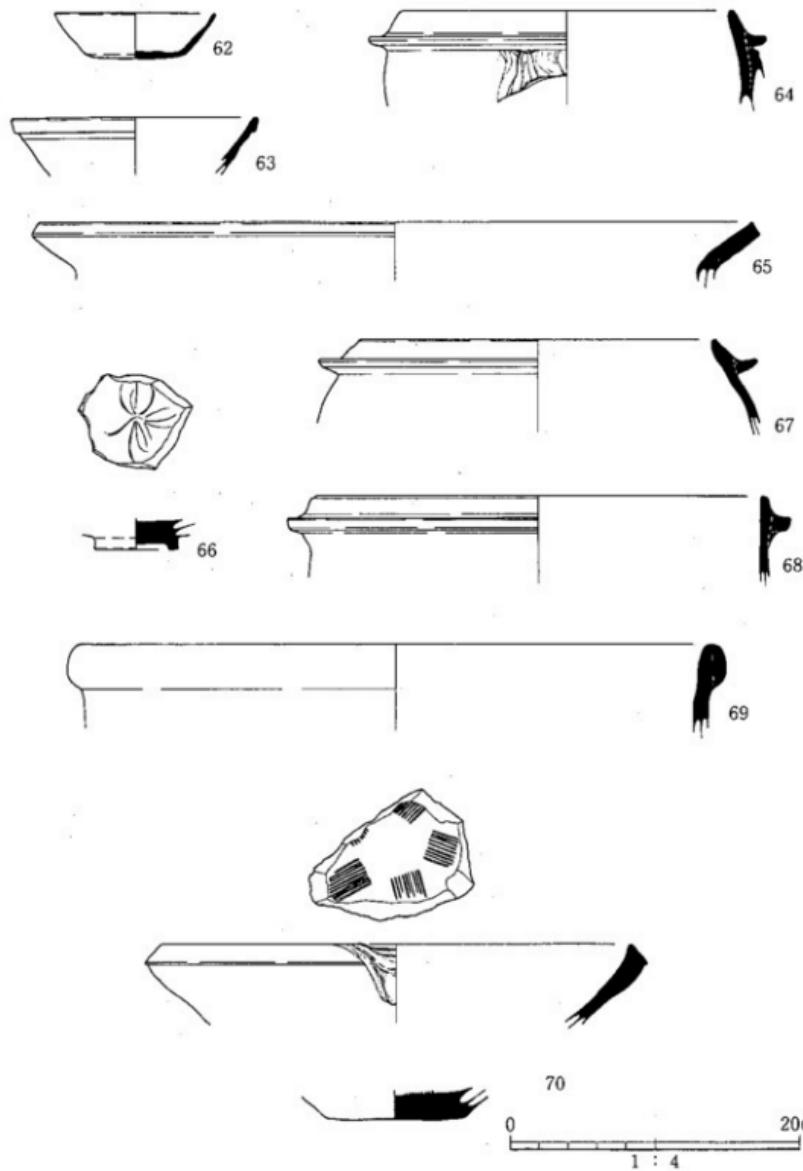


図12 溝SD01(62~65), SD03(66~70)出土遺物

(iv) 土壙SK04（図10, 12, PL-4, 9）

平面形が不整橢円形を呈し、長径2m、短径1.1m、深さ0.3mを測る。土壙SK01・02により一部が壊されている。埋土は、暗灰色砂礫混じりシルトである。出土遺物には、甕(61)がある。

甕(61)は、「く」の字状に短く外反する口縁部を持ち、口縁端部に刻み目を持つ。頭部直下外面に、櫛描直線文+波状文+直線文+刺突文が施され、体部外面には、刷毛調整が施される。

(2) 溝

(i) 溝SD01（図10, 12, PL-4, 10）

調査地内において南北一東西方向へ「L」字状に屈曲する溝である。南北方向部では、幅2.7m、深さ0.8mを測り、断面形が深い皿状を呈するが、東西方向部では、幅1.5m、深さ0.2mを測り、断面形が浅いレンズ状を呈し、規模が縮小するとともに、溝底部が急激に立ち上がる。埋土は、にぶい黄色砂質シルトであり、水流痕跡は認められない。出土遺物には、土師器壺(62)、白磁碗(63)、須恵質陶器三足釜(64)、瓦質甕(65)がある。

須恵質陶器三足釜(64)は、形態的には、土師器あるいは瓦質の三足釜と同様であるが、焼成は完全な須恵器焼成である。

(ii) 溝SD02（図10, PL-4）

調査地内において、北東一南西方向に走る溝である。幅1.3m、深さ0.3mを測り、断面形が、浅いレンズ状を呈する。埋土は、にぶい黄橙色極細砂混じりシルトである。

(iii) 溝SD03（図10, 12, PL-4, 10）

調査地内において、東西方向に走る溝である。幅1.5m、深さ0.4mを測り、断面形が浅いレンズ状を呈する。埋土は、にぶい黄色砂質シルト～黄灰色シルトである。溝底部は、東部において立ち上がり、底部に集石が見られる。出土遺物には、青磁碗(66)、須恵質陶器釜(67)、片口擂鉢(70)、土師器鍋(68)、備前壺(69)がある。

須恵質陶器釜(67)は、三足の有無が明確ではないが、溝SD01出土の三足釜(64)と形態、焼成を同じくする。青磁碗(66)の内面見込み部には、割花文が施される。片口擂鉢(70)は、備前擂鉢の形態に類似するが、須恵器の不完全焼成品である。

V. 小 結

鉄塔建替地区21地区の内、発掘調査が実施されたのは、調査地No.1、No.2の2地区であ

る。前述したように、この2地区においては、現代水田耕土層下約30cmの黄色シルト層上面において、弥生時代および中世の遺構、遺物を検出している。

調査地No.1において確認された堅穴住居跡は、平面形が不整円形を呈し、その一部にテラス状の張り出し部を持つ。張り出し部を持つ形態の住居跡は、徳島県板野郡黒谷川郡頭遺跡SB102, 106, 501, 香川県坂出市下川津遺跡SBNb04, SBNall, SH8602, 8604, 8619⁽⁵⁾, などに見られる。矢野遺跡においても、この形態を有する住居跡はすでに確認されおり、これらの住居跡は時間的にはほぼ並行関係を示すことから、3世紀のある段階に阿波、讃岐において普遍化する形態なのであろう。しかし、本調査地における堅穴住居跡SH01, 02の張り出し部は、その形態・規模・構造において、前述した一群の住居跡との比較においてかなりの隔差が見られる。今回の調査では、この張り出し部に関する機能痕跡を確認し得なかったが、SH01と02の相対的位置関係から「出入口」の可能性も考えられる。集落の全体構造を知る上で、今後、良好な資料と成り得るだろうか。無論、この隔差は、単なる形態的亜種としての理解よりも、住居における機能の相違を示すものとしての理解が必要とされるであろう。

堅穴住居出土遺物は層位の出土ではなく一括資料として理解されるが、型式学的検討を行う余地はある。SH02出土の壺(21・22・29)、壺(25)鉢(31~33)は、V様式の新しい段階に顕著な形態、製作技法を残しており、V様式~庄内式併行期への過渡的な様相として捉えられよう。一方、壺(17・19)甕(26~28)、さらには、二重口縁壺(23)の存在は、前述した一群より新様相として理解され、庄内式併行期に位置付けられるものである。なお、壺(24)は、吉備南部における鬼川市III式段階の影響を受けた形態であると考えられる。また、SH01出土遺物には、SH02において見られた古様相は払拭されており、壺(1), 甕(2~5)と二重口縁壺(6), 小型丸底鉢(16)の共伴関係に代表されるべく新様相を備えている。この時期の土器に対する型式・編年研究の成果としては、黒谷川郡頭遺跡出土遺物に対する一連の作業があげられる。その研究成果に従うならば、SH01・SH02の一括資料には、おおむね「黒谷川I~II式間およびII式」への併行関係の位置付けが可能とされる。⁽¹⁰⁾

調査地No.2においては、溝、土壤などの遺溝が検出されているものの、集落における生活遺溝の主体となるべき住居、建物跡は確認されていない。

土壤SK01~03の出土遺物は、中期(V様式)終末~後期(V様式)初頭に相当する。また、土壤SK04出土の甕(61)はII様式の伝統的な形態を維持しながらも、装飾には櫛描直線文と波状文の組み合わせた文様構成をとり、SK01~03の出土遺物よりもさらに古い様相を

示している。中世遺構として、溝SD01, 03があるが、その性格に関しては不明である。従来、矢野遺跡は弥生時代の集落遺跡としての代名詞的な存在であったが、今後、中世遺構面の調査の進行とともに、中世集落としての矢野遺跡の位置付けがなされるであろう。

また、調査地No.1, 2以外の地区では、堆積土層の把握、遺構面存在の有無、さらに、地山の確認に主眼を置く試掘調査を先行させた。その結果について、以下、概略的に触れておく。

調査地No.3から調査地No.9および調査地No.10～22の各調査地での堆積状況の共通性として、現代水田耕土層下においては、土壤の酸化還元互層の堆積が認められる点が挙げられる。これは、土壤に含まれる鉄分・マンガンの理化学反応を示しているものであり、しいては、調査地周辺部において灌漑用水による水田耕作地としての土地利用が行われていたことを典型的に物語る。⁽¹¹⁾また、この層からは、染付片の出土が見られることから、おおむね、近世以降において数期にわたる水田経営が考えられる。しかしながら、この理化学反応を示す堆積層は、GLより平均-60cmより下位においては示されず、その下位には層厚1.5m以上におよぶ「にぶい黄褐色シルト～粘土質シルト層」の堆積が普遍的に認められる。この層は下位にいくにつれて砂質から粘土質への変化が漸移的に認められるが、肉眼観察における不連続の認定は困難である。調査地No.21では、この層より、13世紀代の瓦器碗が出土している。

また、当初の目的でもあった地山の確認であるが、調査地9・11・16・20～22ではGL-1.8mで砂礫層を確認したが、その他の調査地では湧水が著しく掘削を断念せざるを得なかった。現在の地形図および四国電力側より提供されたボーリング調査の土層柱状図さらに今回の調査状況を考慮すれば、調査地周辺は、旧鮎喰川水系の低位氾濫原であったことを示すものと言えよう。ただし、ボーリング調査の土層柱状図を考慮すれば、砂礫層の各調査地における起伏差は、最大6mにおよび、かなり複雑な地形であったものと考えられる。

これらの諸様相を考慮してこの地域における景観復原を試みてみると、旧鮎喰川水系の低位氾濫原の池部あるいは谷状地形に非常に厚い泥炭地化が中世期に進行し、広大な泥炭地が形成されたものと考えられる。おそらく、この泥炭堆積土壤は、後世、水田耕作にあたり好条件を備えていたのであろう。現在においても、水田耕作地が拡がるこの地域(不動町)の景観は、近世以降における水田経営が活発に継承されていることを示しているものであろう。

矢野遺跡における調査は、1970年代以来、点在的に実施されているが、未だ、僅かな資料集積しか成されていない。また、それに伴う遺跡の研究も停滞的である。矢野遺跡に西接する気延山には、1990年、三角縁神獣鏡が発見され注目をあびた宮谷古墳をはじめ、未確認資料をも含めてその実態は明確ではないが、各期にわたる多数の埋蔵文化財の存在が考えられており、これらの造営集団の平地部における活動痕跡を明確に示すべき事実が矢野遺跡に包蔵されているものと考えられる。今後、矢野遺跡における集落様相の把握、土器型式の確立などをを目指すためにも、良好な調査による資料蓄積が何よりも望まれる。

(註)

- (1) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要1』、徳島、1989年。
- (2) 岩崎 直也「四国系土器群の搬出」、『大阪文化誌』第17号、大阪、1984年、15~27PP。
- (3) 徳島考古学研究グループ「気延山周辺遺跡分布調査報告」(1972年)によると、多基
多数にわたる埋蔵文化財が確認されている。
- (4) 都出 比呂志「古墳出現前夜の集団関係」、『考古学研究』第20巻第4号、岡山、1974
年、20~47PP。
- (5) 徳島県教育委員会『黒谷川郡頭遺跡I』、徳島、1986年。
- (6) 徳島県教育委員会『黒谷川郡頭遺跡V』、徳島、1990年。
- (7) 香川県文化財保護協会『瀬戸大橋建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報(VII)』、香
川、1986年。
- (8) 香川県文化財保護協会『瀬戸大橋建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報(VIII)』、香
川、1987年。
- (9) 徳島市教育委員会『弥生時代の徳島市—埋蔵文化財資料展』、徳島、1983年。
- (10) 黒谷川諸型式への併行関係については、菅原康夫氏の御教示による。
- (11) 八賀 晋「発掘調査からみた古代水田の土壤環境」、『地理』Vol.28, No.10、東京、
1983年、20~29PP。

図版

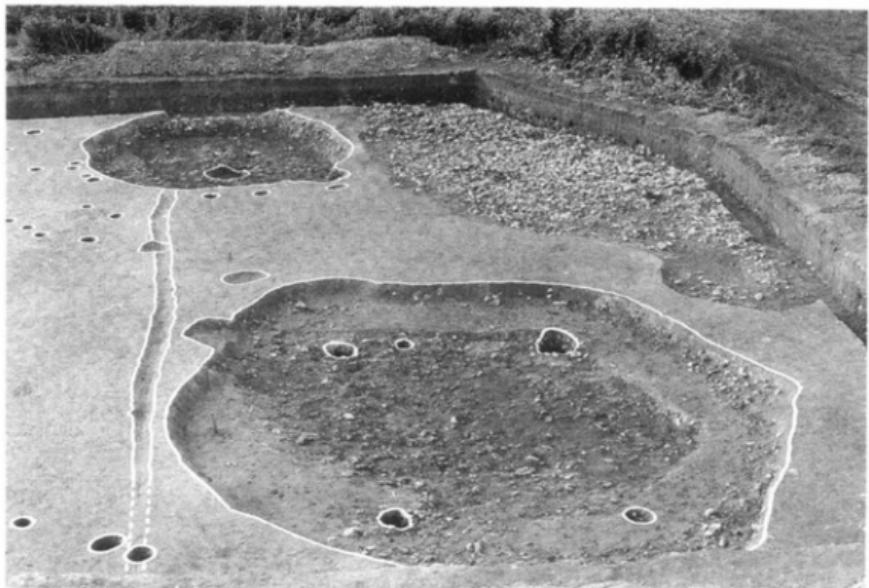


調査風景



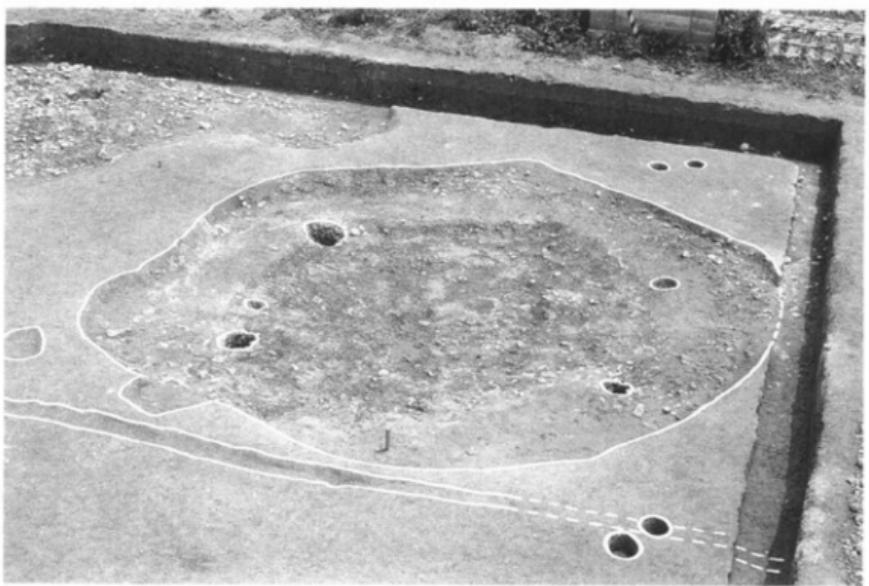
調査地 No.1 全景

南より



豎穴住居跡 SH01 SH02 検出状況

南より



豎穴住居跡 SH01 検出状況

南西より



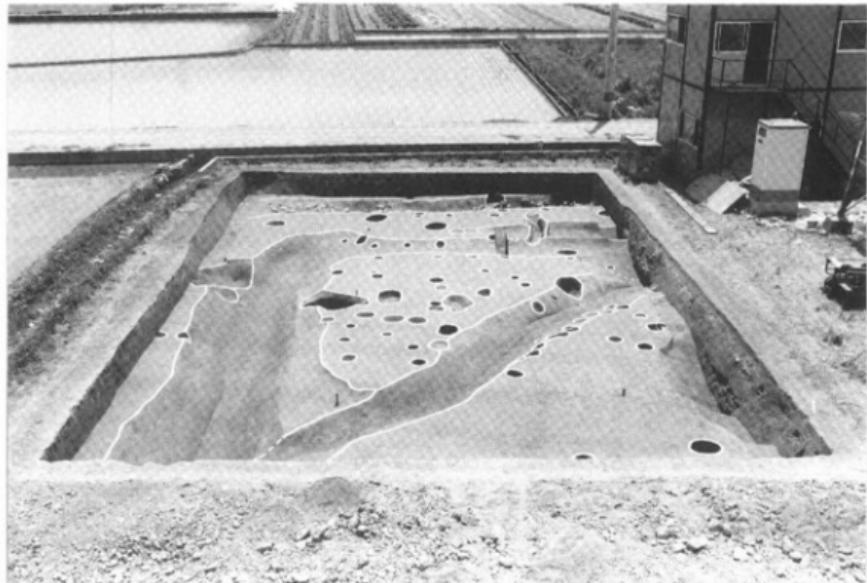
豎穴住居跡 SH02 検出状況

南西より



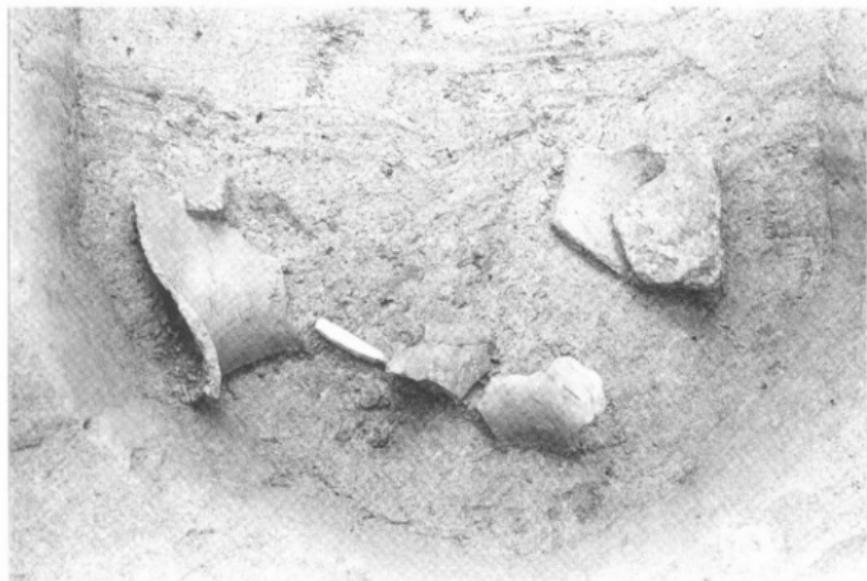
豎穴住居跡 SH02 遺物検出状況

南より



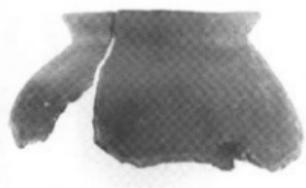
調査地 No. 2 全 景

北より



土 壤 SK01 遺物検出状況

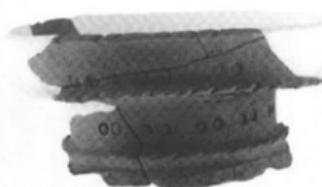
東より



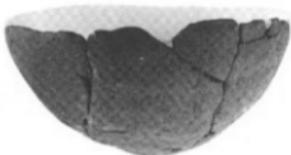
5



11



6



12



8



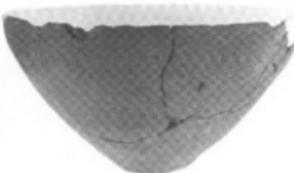
15



9



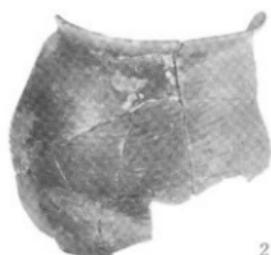
16



10



17



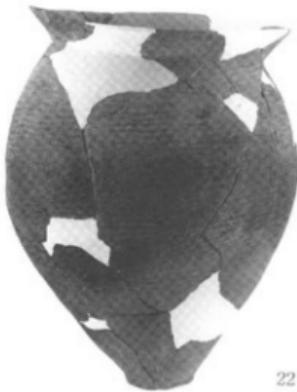
21



18



19



22



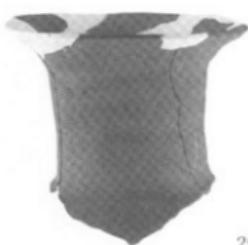
20



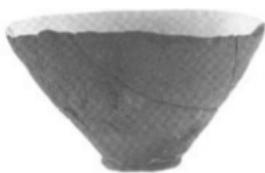
23



24



25



30



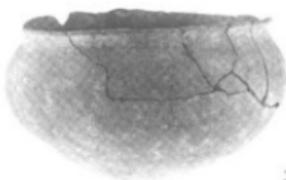
27



31



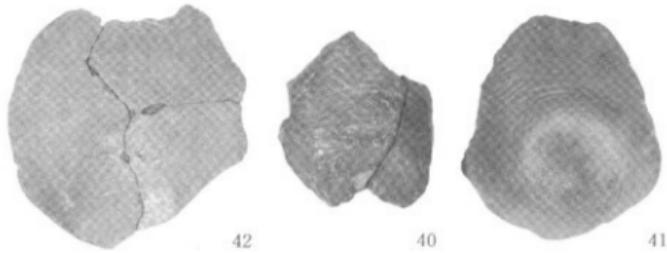
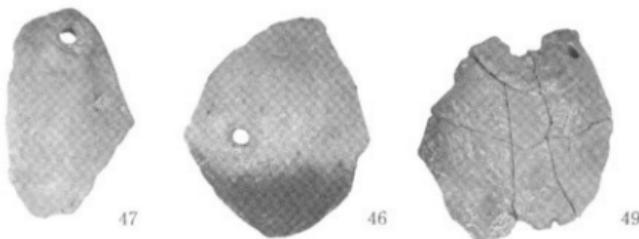
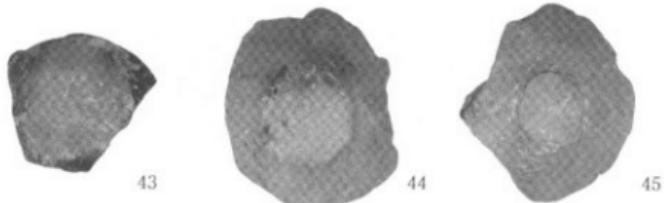
29



32



33





52



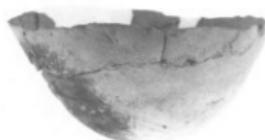
57



56



59



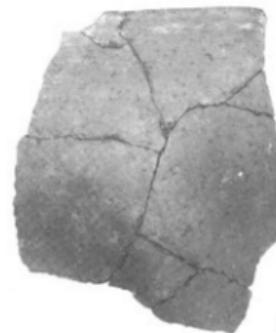
53



60



54



61

調査地 No.1 土壌 SK01(52), 自然落ち込み遺構SX01(53・54)

調査地 No.2 土壌 SK01(56・57), SK03(59・60), SK04(61) 出土遺物



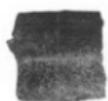
62



64



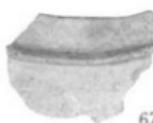
63



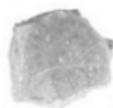
69



68



67



66



70



71

矢野遺跡発掘調査概要

—四国電力応神東線鉄塔
建替工事に伴う発掘調査—

1991.3

編集 徳島市教育委員会

発行 徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

印刷 グランド印刷株式会社